

月日: 平成30年 7月 6日 (金) 時間: 15:30~17:30 場所: 福岡市科学館6階サイエンスホール

出席者:

<外部評価委員>

- 縣 秀彦 自然科学研究機構国立天文台 天文情報センター 准教授 普及室長・国際普及室長
- 伊藤 克治 福岡教育大学 理科教育講座(化学)教授 附属久留米小学校・久留米中学校 校長
- 緒方 泉 九州産業大学 教授 博士(文学)
- 栗原 隆 シンフォニックアソシエーション 代表

<事業者>

- 板里 株式会社福岡サイエンス&クリエイティブ 代表取締役
- 丹治 株式会社福岡サイエンス&クリエイティブ 取締役
- 伊藤 福岡市科学館 館長
- 横田 福岡市科学館 事務局長 (敬称略)

配付資料: 福岡市科学館年報-平成29年度版-
 (参考資料1)H29利用状況まとめ
 (参考資料2)H29利用者アンケート集計結果
 (参考資料3)年間パスポート所持者アンケート結果と分析
 (参考資料4)H29利用者意見集計結果

■ 議事内容(概要)	発言者
<p>1. 委員自己紹介 4名の委員に所属, 専門分野等について自己紹介いただいた。</p>	
<p>2. 委員長の選出 要綱第3条にもとづき, 委員長を互選の結果, 満場一致により緒方氏が選出された。</p>	
<p>3. 平成29年度事業報告 横田事務局長から, 年報および参考資料に基づき前年度の事業内容等について報告。</p>	
<p>4. 委員意見交換・評価等 事業報告を受け, 各委員から意見や評価, 提言等が出された。</p>	
<p>体験学習の回数が大変多く, 現場のスタッフは相当疲れているのではないかと。</p>	<p>縣委員</p>
<p>確かに様々なプログラムがあり相当な回数をおこなっており, スタッフが一所懸命に取り組んでおり, 疲労困憊という面もあるが, 要求水準の項目と事業者提案の項目両方がミックスされており, どうしても回数をクリアしなければならないという点が初年度ある。我々も推進しながら中身に関してもっと有効なものをつくらなければならないという使命感もある。次年度以降は回数もさることながら, 中身をもっとターゲットを絞るなり若しくは広げるなどしてより充実したものにしていきたいと思っている。</p>	<p>丹治</p>
<p>もう一つには, 科学館スタッフだけがプログラムを実施するのではなく, 地域の企業, 大学等いろいろな方に来ていただき, 科学館を自分の施設のように使っていただくものが実験の回数やセミナーなどにカウントしていければありがたいと思っている。これは福岡市との打合せが必要だが, 皆でひとつくりを実現できたらいいと考えている。</p>	<p>横田</p>
<p>それは「福岡市科学館の約束」の4番に対応するものだと思う。他の「約束」も含めて, 開館後どれが果たせて, どれは弱かったか, 評価改善しながら次の年に向けていく必要を感じる。10月に一年経つ時点などで「約束」の順位付けのようなものは必要。</p>	<p>緒方委員長</p>
<p>約束4) 地域づくりにウエイトを置いたもの, 5) いろいろな方に科学館活動を支援していただく側面, が緒方先生の言われたことにも対応すると思う。これらの約束を果たすことで, 科学館活動を旺盛にやっていくことにつながり, それが地域のためにも, 科学館のためにもなるので, このような方向性で今後も追及していきたい。</p>	<p>伊藤</p>
<p>プログラム開発に関しては, SC開発会議分科会でもどうあるべきか討議中である。連携がどうあるべきかについてもSC会議でも議題に挙げて検討しているところ。 まだ開館後半年の中で地域の方と深い連携についてはまだ組んでいないところがあり, 特に地域との連携はまだこれからである。 企業の方々も出展ブースをつくるだけでなく一緒に教育プログラムをつくっていくようなことも少しずつ動いているので, これからも積極的に取り組んでいく。</p>	<p>丹治</p>
<p>利用者が計画比毎月200%超えるというのは, この半年だけでなく準備・計画段階から200%大成功であったということ。驚くべきものであり誇らしいこと。とはいえ, これだけ達成しているのを53名のスタッフや限られた予算でおこなうのは, やろうとしてもできないことやスタッフのモチベーションなどひずみもあるのではないかと。利用者数の想定はどのようにシミュレーション, イメージされているか。また長い期間のPFIにおいて計画の変更や事業の見直しは検討されているか。</p>	<p>縣委員</p>

当初計画では、1年目60万、55万、50万人、,、と落ちて、5年目にリニューアル予算を投下して55万人に戻すという計画。計画変更の余地はあるが、まだ一年経過していない現時点では判断できない点が多く、様子を見ているところ。福岡市からのサービス料に利用料収入を上乗せし、利用料が増えるほど活用することが可能である。しかし利用者数増加が利用料収入に直結しているわけではない。利用者数の変動に対して有料利用者数がどのように変わるか、これも1年経過しないと判断し兼ねる。

横田

有料入館者数について、40%きている。その意味ではお客様がたくさん来てくださる＝儲かっている、ではない。スタッフの疲労、残業代等、事業としては潤沢ではないというのも現実

丹治

一年動かすと当初の予定とは変わってくるので、できる範囲で計画変更は必要であろう。「フィールドワークができていない」という報告があったが、そこまでしないといけないのか。ニーズに対してスタッフが動けないという問題なのか、内容的な問題なのか、見直していく必要がある。また体験学習プログラムのメニューについては、今年度は担当部署が考えてアウトバウンド的をやっているものか、(参加者の)声を拾ってやっているものか。

伊藤委員

要求水準があり、年間・月間の実施回数や基準があり、それを割り込むことはできない、変更には市の了承も必要。単純にはちょっとやり過ぎかと思うところも確かにある。一年間しっかりやったらうえて改善や変更を協議検討していけたらありがたいとは思う。プログラムの中身は回数を稼ぐ点でもこれまでは他の所でもやっているような比較的やりやすい内容でやってきた感はある。今年度からはより本格的に当館らしいものやしていきたいという意図は持っている

伊藤

開館前につくった基準の回数に縛られすぎると、やるのが目的になってしまうので、そこはある程度ニーズをふまえてやわらかな微修正していけるといい。

伊藤委員

要求水準がどちらかという量に重さがあるので、そこに質を加味して量の変更も含めて、市民の方々や子ども達の満足度が上がるような形でやっていくことが一番だと思う。

伊藤

体験学習の実施主体について、先ほど地域資源の活用という面からも館外の団体等と連携を検討したいというお話があったが、求めがあれば応じられるところはあると思う。企画者を募集する考えがあれば、ぜひ福岡教育大学にも声をかけていただきたい。将来福岡市内で小中学校の先生をしたいという学生がたくさんいるので、たとえば学生が企画して子供向けの体験学習などを科学館でできるとなるととてもいい。学生による子供向け企画等、館の負担軽減という面もあるが、外部機関の参画拡大という視点からも大事なところかと思う。

伊藤委員

そもそもこのPFIをやるにあたっての計画は、様々な博物館等を福岡という土地柄にあうかどうかは1年をやらないと状況が分からないというところがあった。この一年で要求水準的にはやった上でこれから新しいこともしていけないと15年という期間はもたないとも感じている。

地域で科学館をつくっていくということにはいろんな皆さまのご協力を賜りながらやらなければならない。それが人が育つということでもある。なかなか一年目ですぐそういう形のなかで地域に対してお願いすることはできなかったが、これから地域に対していろいろ意見をいただきながら参画していただきながらやっていきたい。

板里

全体の5%くらいしか高校生が来ていない。中学生高校生をこれからどう増やしていくかも課題の一つ。

アンケート結果からも中学・高校生の少なさが目立つ。

一方で交流室の利用は中高生が多く、潜在層として今は自習目的の来館が目立つが科学館活動に積極的に入ってきてもらうような、魅力ある科学館活動を展開していきたい

伊藤

「人が育ち、未来をデザインする」という運営方針について、人と人の交流、協働の中で未来をデザインすることに向かっていく印象。ただ交流しているだけではお話し合いで終わってしまうが、協働することで何かを目指すことが未来をデザインすることに向かっていくと理解する。プログラムを自分達で作るといふ形の協働もあるし、来てくれた人が科学館と一緒に何かプロジェクトのようなものをするということが起こってくると、未来をデザインすることが、人が育つ中でどんどん発展していく可能性があると感じた。協働プロジェクトをスモールスタートしていくと来年度に向けていい突破口になっていくのではないかと。

栗原委員

大学等から来ていただいて協働する際には単独の大学サークルでの活動だけでなく、科学館が核になってネットワークを構成し、科学館の中で子ども達が育つようなプログラムを更に提起していきたい。科学的な知識を増やすことはもちろん重要だが、人が人として育っていくことが更に重要だと個人的には思っている

伊藤

最近の気づきとして、週末はプログラムの実施場所が不足気味であり、企業連携イベント等、要求水準の回数に兼ねてカウントさせていただくことで実施が可能になった例もある。

横田

名古屋科学館並みに集客しているというのはすごいこと。国内の科学館の成功事例として認知されている。夏休み行きたい科学館に挙がっているなどスタートダッシュは素晴らしいが、それが逆に大きな足かせとなる(今後も同様以上の来場者数を期待される、など)ことも危惧される。評価すべきことは数だけではない。「人が育つ科学館」という面を評価するには、少ない人数をいかに一線まで引き上げるか、というような質量両面での成果を要求されると思うが、科学館としてどのように優先順位をつけて処理するかが重要。お客様にとって快適な人数、スペースがある、スタッフにとっても同様。どの事業の場合も、どのフロアはどのくらいの数が適正というのを想定し、手を抜けるところは大きい手を抜くべき、そうしないと手をかけるべきところに注力できない。そういう状況は評価側すると既に現時点のデータからも一部垣間見えている。どこに優先的に手をかけて、手を抜けるところは抜く、メリハリをつけた運営が必要だと思うが具体的な戦略はあるか、まだなければぜひ検討していただきたい。

縣委員

具体的な戦略は今のところないが、とりあえず一年待ちたい。数の多さが喜ばしい面と、待ち時間の長さ等、評判を落としている側面も心配。

伊藤

長い待ち時間を経てモチベーションが低下した状態で来館されると館の印象がずいぶん違うと思う。ご意見いただいたメリハリをつけてやっていくやり方は大変重要、探していきたい。

人が育つエビデンスについては年度計画に加え5年間の中期計画も策定し、その中で試行錯誤している最中。「科学館」「福岡市」ということで他の文化施設と違う印象を受けている。ものを見るだけの施設と違い、実際に参加して一緒に作っていく施設なので、プログラムが新しくなっていくことで意外と人は減らないのではないかと推測している。

館内での体験がどれだけ充実しているかが重要、その点ではこれだけのプログラム数というのとはとても充実する数だとは思いますが、どちらかというと受動的な体験なのではないか。能動的な体験に変えていくことを考えると、人が育つ場のひとつにクラブ活動があると思う。クラブで育ったこともたち、大人たちが協働プログラムを提案できる人材になっていく。地域の中の存在という点もこの科学館は重要視されていると思うので、ブルックリン博物館のように地域住民と定期的な懇談会を開催し、地域の方々の活動の場所となるなど、有料の利用者を増やしていくというのも大事だが、15年という長いスパンを考えると、地域の中での地固め、周辺地域の方とのしっかりとしたパイプづくりを丁寧に行う必要がある。大学、学生との連携についても、企画したい学生はたくさんいるが商品として成立するプログラムである必要があるので、企画立案講座などを並行してやっていくと協働できる事業も開拓が見込めるし、利用者層も自分達が参画できるならということでもそこから広がることもあって他大学との交流等広がり期待できる。内側の人が育つ、周りの人が育つという視点からは様々な取り組みの可能性があると感じた

館内に限らず地域に出て地域の方と一緒に取り組んでいくことも含めて科学館活動と考えている。「至る所に科学館」というイメージで活動をおこなってきたい

利用者の声に重力波のニュースが館内で取り上げられていなかったことを残念だったという意見があったが、最新のニュースを直ぐに展示に反映することはやはり困難だと思うが、スタッフのレベルでウォッチングしていて、ネットなりを使って常に最新のニュースをアナウンスする、「科学館はやっぱり最新情報を把握しているんだな」という雰囲気をつくるのは大事。中高生の来館が少ないことについては、一般的に母親が小学生を連れてくるのに対して父親が中学生を連れてきていない、ということの意味している。父親が中学生のこどもを連れてきたくなるような最新の科学に関する情報や知識が館内にあることを発信しないと、この構造は変え難いのではないかと

展示は5年たてば劣化してしまう。この科学館が15年に限らず福岡市として長く存在する為には、年齢を問わず長く科学館に来ていただく施策を立てていかなければならない。

最新の情報を科学館がつかんでいてそれをブロードキャストするだけでいいと思う。そういった啓発活動はあった方がいいし、情報発信をすることによってネットワークの密度も上がるのでぜひやってほしい。

重力波のご意見は館としても重く受け止めている。最新科学情報の発信は科学館の使命と考えており、年報p11に記載の展示更新プロジェクト分科会の一つ「新しい科学の情報と動向分科会」で検討を開始している。まずは、「はやぶさ2」の情報を発信したいと考え、準備中である。

4Fサイエンスナビでの火星大接近の分かり易い解説やプラネタリウムの番組にも「はやぶさ2」の最新情報が盛り込まれているなど短い期間だが早速努力されていると感じた。中学生・高校生の来館はどれも少なく、ただ数の面でたくさん来ればいいという考えではなくキャリアや成績とか、たとえば重力波の研究者が九州大学にいるか忘れたが、九大はじめ大学や研究所や企業も多くあり、企業や大学とのパートナーシップや協定を結び、講演や展示提供、監修等の協力を得たり、またはボランティアで学識経験者や大学生、高校の先生等専門性の高い地域の方に参画いただき、市民の方の興味関心の高いテーマにフレキシブルに対応できる体制がとれると更によいと思う。

九大との包括連携をご指摘の意図かと思うが、現状は少し違う方向性で動いている面もあるので、方向修正も含めて検討していけたらと思う。

お話のとおり九州大学との包括連携もあり、最新情報をキャッチして、展示でなくてもサイエンスナビの黒板等活用して館内から発信していきたい。

中学生を呼び込むという観点から、科学館の「場」としての活用を提言したい。福岡市内の高校の理数科やSSHの課題研究発表会などを館ホールでおこない、その高校への進学希望の中学生や保護者を招くしかけはどうか。また、地域と共にある学校づくりのなかで、中学生は自尊感情が低いので、地域でボランティア活動体験で自尊感情を育む例も増えてきている。そういった取り組みの一つとして、中学生が子ども向けの実験教室を開くというのはどうか。実際に科学館近隣の公民館から相談があったこともある。ここはアクセスが良いので、館を会場にしてぜひそういったイベントを開催すれば中学生が来る必然性が生まれ、中学生にとってもサイエンスの勉強にもなるし、自尊感情を高める一助にもなる。

前半と後半と二つお話があったと思うが、理数科関係の研究発表会という発想は未だなかったので、追求できるところは追求していきたいと思っている。また、中学生が実施者となる子ども向けの実験教室等については中学生に限らず小学校高学年が低学年に対してということもありうると思うが、同様の事例は千葉市科学館で取り組みがあると聞いており、当館でもぜひ実施したいと以前から考えていた。積極的に今後考えていきたい。

中高生は競争ものやバトル系にしないとなかなか乗ってこない傾向あり、全国規模のロボコンや科学の甲子園ジュニアなどあるので、学校単位での取り組みもされているだろうが科学館が拠点となってサポートしていくと良いと思う。

ロボコンは既にロボカップジュニア大会等取り組んでいる例もある。ロボットに限らずそれぞれの関心に応じて様々な分野で考えられるはずなので積極的に検討していきたい。

全国規模の大会に出られるような道をつくっていけると良い。たとえば日本天文学会でもジュニアセッションというものをおこなっているが、最近では学校単位でなくて地域で科学館などから参加するケースも増えている。地学をやっていない学校もあり、天文学を教える先生がいない。ここはスタッフも充実しているので、そういう子たちもサポートできると良い。

丹治

緒方委員長

伊藤

栗原委員

板里

栗原委員

伊藤

縣委員

伊藤

丹治

伊藤委員

伊藤

縣委員

伊藤

縣委員

一番大事なことはスタッフが気持ちよく働き笑顔で迎えてくれるか、来た時に笑顔で迎えてくれるかしんどそうか、は待ち行列以上に来館者に大きな影響を与える重要な要素。
スタッフの自己点検、グループでも点検をし、何をどう改善したらいいかという点が評価委員会にも上がってくると、委員も経験や知見からアドバイスや提言もできる。
なかなか内部だけでは解決しないことを何とかするために外部評価がある。働き方改革、ストレスチェック、ハラスメント、ヘルスチェックといった労働の面も含めて、人がなによりこの科学館の財産だと思う。博物館と違い一次資源を多く持たない科学館は人がいちばんの財産なので、気持ちよく働ける体制作りに努めていただきたい。

縣委員

国際会議は大変評判がよかったが、CAPでの批判・非難は一つだけ「ごみ箱がない」ということであつた。なぜ置かないのかは持続可能な発展を目指す大きな理念に基づいたものなので、そのポリシーをもっと明確にいろんなところに出された方がいい。

縣委員

ごみ箱を置かない理由については来館者のご意見に対する回答として交流室に掲示しているのみで、具体的な活動として結実していなかった。館のポリシーとして積極的に打ち出していきたいと思う。単に「ご不便をおかけします」ではなく、これがトレンドです、という表明を積極的にしていきたい。

伊藤

スタッフについては笑顔がいつまでもより良いものであるよう、労働環境をつくってきたい。

伊藤

5. 委員長総評

未だ一年たっていないため、これからを考える上では材料がまだまだ少ない状態というのが現状ではある。
要求水準の達成については、福岡市と事業者のすり合わせを1年1年の中で見直しが必要だと感じた。
一番大切で忘れてはいけないのは人が育つ館であること。利用者が育つことも重要だが、快適な空間を考えると、スタッフが育つことを併せて考えていくことが要求水準を十分に達成していくための大切な要素である。
そのためにはプログラムの量、そして質の担保が必要なので、4つの分科会が丁寧に進み始めることも重要。
また、外とのつながりは館の使命でもあるので、地域を巻き込むネタを持ち、いろんな方と協働していくことも大事。

緒方委員長

中学生にとっても来てみれば分かる面白さがあると思う。中高生の生活を考えると部活や塾に追われているという現実もあるが、高校の説明会やSSHの発表会を館で開催するなどして、子ども達に目標ができる館として意識付け、子ども達にも保護者の方にも利用価値を高められてくれれば良いと思う。

有料利用者数がそれほど多くないという指摘はあるが、これだけ多くの方が来館されていて、ここに行ってみたく話題になっている現状に注目し、今後も館について会話を続けてくれるような場所であるために、一年を終えてまた次の動きを丁寧に考えていくことが大切だと思う。

地域との連携を非常に大切にしていきたいという点が今までにない科学館であると思う。
より良い科学館作りにご支援賜りますようお願い申し上げます。

板里